

## 『終わりのない年月：65年被害者の経験を理解する』

## 日本語版序章

ジョン・ルーサ

アユ・ラティ

「どれだけの人が殺されたのか」。人はこの本を編集した私たちが1965年から66年にかけてインドネシアで起こった虐殺と拘束について調査していると知ると、よくこう尋ねる。私たちは問い返す。どうして死体の数がそれほど重要な問題なのか。数がわかったとすれば、ではその数は何を意味するのか。このインドネシアでの大量虐殺を、20世紀中に起こった様々な虐殺事件のリストに加えようともいうのか。より多くの人間が殺された事件ほど重要なのか。ではどれだけの人間が殺されたのかわからないとしたら、今に至るまでその数を知ることが不可能だとしたら、私たちはどうすればいいのか。

我々はこの調査の初期の段階で、殺された人間の総数調査を最重要とするのをやめることにした。なぜならこの虐殺事件に関しては、インドネシア史研究の権威を含めて、誰もその基本的な質問にさえ確かな証拠を持ってこたえることができていないのだから。この虐殺の実行に直接の責任を負っていたのは誰なのか。軍人か、あるいは民間人か。だれが犠牲となったのか。インドネシア共産党 (PKI) の支持者だけなのか、あるいはでたらめに選ばれた個人たちだったのか。どのようにして虐殺が実行されたのか。冷徹な処刑だったのか、それとも自然発生的に錯乱した暴徒たちによる統制不能の事態だったのか。いつ虐殺が始まり、いつ終わったのか。もし埋葬されたなら、犠牲者たちはどこに埋められたのか。虐殺と逮捕の間にはどのような関係があったのか。逮捕された人々は死を免れたのか、あるいは殺されたものもいたのか。その出来事についての研究も、記録も、そして理解も乏しいなかで、確かな数値を得ることは不可能である。

我々は2000年にオーラル・ヒストリーの調査を開始した。そのとき我々は次のようなシンプルな確信に基づいてこれを始めることにした。すなわち1965年から66年にかけてインドネシアでは何がしかの人道に深刻な惨事が発生したということ、そしてそのときの出来事とその意味をインドネシア人自身が議論し始めるべきときがすでに来たということ、である。はじめにテロ行為の犠牲者に関する調査を行うこととし、殺害された人々の親類、政治囚として投獄されていた人々とその家族たちに取り組みをおこなった。なぜならこうした人々がもっとも沈黙を守ってきたからである。それまでインドネシアに存在したテロの時代に関するほんのわずかな議論といえば、加害者の側からのものばかりであった。我々は犠牲者たちの側からの証言によって、これまでインドネシア人が語ることでできなかったインドネシア史上の事件について、新しく、より正確で詳細かつ広範囲にわたる検証が開始されることを展望していた。大虐殺のなかで国軍戦略予備軍司令官スハルトが権力を握り、その後32年間にわたっ

て権力の座にすわり続けたが、この独裁体制が大虐殺事件に関する社会的言説を規定しつづけてきた。独裁体制の崩壊によって、スハルト体制の血にまみれた起源について自由に議論することが今やっと可能になったのである。

1965年10月1日の朝、国軍司令官アフマド・ヤニを含む6名の国軍高級将校が自宅から連れ去られ、そして殺害された。国軍司令部でヤニに次ぐ地位にあったスハルトは国軍の指揮権を掌握した。将校らを拉致し殺害した実行犯らは、ジャカルタの国営ラジオ局を占拠し、自らは純粋に軍事作戦を実行した軍人であると表明した。彼らのラジオ声明によれば、実行犯のリーダーらはスカルノ大統領の理想に忠実に従う国軍大佐であり、国軍指導部内から反スカルノ分子を排除する目的をもって、自らを「9月30日運動」と名乗った。

スハルトおよびこれに同調する国軍幹部らは2日間のうちにこの「9月30日運動」を制圧した。以降、この出来事をどう描くかは彼らの自由となった。彼らはこれはインドネシア共産党よるクーデター未遂事件であり、共産主義者が全国的な反乱を開始しようとしていると発表した。国家は緊急事態にあり、国軍は共産主義者による蜂起の開始を鎮圧するために戒厳令を必要としている、と彼らは主張した。一方、スカルノ大統領は国軍のこの主張に対して繰り返し反対を表明した。スカルノは10月1日の事件は「(インドネシア民族)革命の大海のなかのさざ波」にすぎず、権力機構の大規模な刷新や共産主義者に対する暴力など必要とせず解決できる小さな危機にすぎない、と主張した。しかしスハルトらは共産主義者とスカルノ大統領に敵対する道を突き進んだ。スハルトはしだいにスカルノ大統領の権力を侵害していった。彼は1967年までスカルノを名目上の大統領としていたが、1966年にはすでに閣僚の任免権(さらには逮捕・処刑権まで)を掌握し、事実上インドネシアの支配者となっていた。

テロ事件は当時多くの人にとって謎に満ちたものだった。1965年10月、はじめの一週間で国軍はほぼすべての新聞社を閉鎖し、発刊継続を許

されたわずかな新聞に対して検閲を開始した。また国軍自身がいくつかの新聞の発行を始めた。1965年後半から1966年後半に発行されたこれらの新聞から、虐殺に言及した記事を見つけることはできない。これらの新聞は暴力によらない形で共産主義者に対する弾圧だけを報じている。たとえばインドネシア共産党の支持者がさまざまな政府機関から排除されたとか、共産党傘下の諸団体が解散させられた、学生たちが政府に共産党の非合法化を求めてデモをした、などである。新聞記者たちが虐殺事件のことを知っていたのは疑いない。恐るべき事件の話は口伝えに広まっていた。だが彼らはこれについて書くことをしなかった。代わりに記者たちは、国軍の心理戦専門機関が流すフィクションで紙面を埋めた。10月1日に6人の将校を拉致、殺害したのは共産党メンバーで、むごたらしい拷問が行われた。性器を切除し、目の玉をえぐりだし、100枚もの剃刀で体を切り刻み、その間中、女の共産主義者たちが裸で踊った、というフィクションである。当時、スカルノ大統領はこうしたふざけた話を否定し、これを伝えた新聞を非難した。だがすでに権力は彼の手にはなかった。メディアは国軍にコントロールされていた。のちにスハルトの時代を記録する全国紙となるKompasのような独立系の新聞でさえも、国軍の反共産党キャンペーンに加担した。

国軍は1965年10月以降、海外からのジャーナリストの活動を厳しく規制し、多くの場合入国を禁止した。なんとか入国し、滞在できたわずかなジャーナリストもジャカルタから出ることはできなかった。ジャカルタにいるジャーナリストからの情報の多くはスカルノ大統領とスハルト将軍による権力内部での政治的駆け引きに関するものだった。海外のジャーナリストたちは国軍スポークスマンの話から発生している虐殺は国軍によるものではなく、統制不能なまでに高まった民衆の怒りの表れである、と信じ込んでいた。1966年3月に国軍が報道規制を緩和するまで、彼らは虐殺事件についての詳細を伝えることはできなかった。ジャーナリストたちが首都の外へと取材を再開するにしたがって、虐殺の規模がしだいに明らかとなる。最初に調査を行ったのはワシ

ントン・ポスト紙のスタンレー・カルノウである。ジャワおよびバリなどでの2週間の調査によって、彼はこの虐殺によって50万人が殺されたとの推定を発表した。数ヶ月後に調査を行った彼の同僚で同紙のセイモワ・トッピンは、総数では50万人以上が殺された可能性があるとは結論づけた。この虐殺事件に関する記述では、これら海外のジャーナリストによるかなり粗い推定数が繰り返し引用されてきた。この50万人という数は、「何人殺されたか」という質問に対する標準的な回答となった。だが、これは信頼に足る数値ではない。実際の数はこれよりかなり少ない可能性があり、あるいはもっと多い可能性もある。つまり誰にもわからないのだ。

海外特派員のなかには、国軍関係者と反共民兵組織が虐殺を行っている、あるいは虐殺が組織的かつ秘密裏に実行されていると報じたものもあった。カルノウはジャワ中部の町サラティガでのある虐殺事件について次のように報じている。「国軍の部隊長は各建物で、リストのなかにある名前を読み上げ、『法の名において』彼らに有罪を宣告した。法廷など開かれてはいないのである。結局、60人の囚人たちはトラックに乗せられ、小隊に先導されて真っ暗な水田とゴム農園のなかを6マイルほど運ばれ、ジェロック村に近い空き地に到着した。近所の農民たちは前日、村の長から大きな穴を掘るように言われていた。囚人たちは穴の縁に並ばされ、数分のうちに銃殺された。生きていたがそのまま埋められた者もいたと思われる。」こうした話からカルノウはジャワ中部では国軍が継続的、組織的に虐殺を実行したと結論づけた。セイモワ・トッピンは国軍が虐殺に対する自らの責任を否認しているのは、トッピン自身の調査と矛盾するだけでなく、スハルト体制下のある国軍司令官による個人的証言とも矛盾していると指摘している。東ジャワ地区のスミトロ総司令官は彼のインタビューに対して、1965年11月スハルトがインドネシア共産党を壊滅させるための詳細な命令を発したと述べている。スミトロとその側近は同年12月、東ジャワ地区内の各部隊を訪問しこの命令について現場に支持を出している。トッピンの記述によれば、

スミトロは「現場の指揮官たちはできるかぎり多くの共産党幹部を殺害するために全力を尽くした」と認めている。

すべての海外ジャーナリストが、国軍が共産主義者の虐殺を組織していると報じたわけではない。虐殺の責任は民間人のみにあるとする国軍の主張に従ったものもいた。こうした親国軍的なジャーナリストたちは、インドネシア人は未開で、後進的で、暴力的だとするオリエンタリズムのステレオタイプを強調した。彼らの報道では、大量虐殺はインドネシア共産党の長年にわたる独断的な態度に対して、熱しやすすい民衆たちが突然、理性を失って復讐心を爆発させたものであると繰り返し説明された。ニューヨーク・タイムズ紙はC.L.スルツバーガーによる社説「国民が錯乱(amok)に陥る時」を掲載した。彼によれば虐殺は「人命を軽視し、暴力に満ちたアジア」で起こったのであり、驚くほどのことではない。この流血の惨事は、マレー語のamok(錯乱)という単語がマレー語としてはめずらしく他の言語でも使われているように、マレー人の内に突発的に沸きあがる流血への欲求という奇妙な気質を証明するにすぎないのだ、という。同様に、ドン・モセルがライフ誌に掲載した記事もまた前近代のエキゾチックなインドネシア人についての低俗な決まり文句を繰り返している。いわく「他のどの場所でもなく、この神秘的で愛すべき島々において、…事件は想像を越えた形で、極めて暴力的に発生した。それは単に狂信的というのではなく、流血への欲求とある種の呪術に彩られていた。」暴力は国軍によって行われたのではない。それは完全に民衆によるものだ。バリでの「熱狂的」な虐殺は「残酷な祭礼」のようだった。いたるところで「集団的ヒステリー状態」が発生した、というのだ。ニューヨーカー誌にのったロバート・シェイプリンの冗長な記事もインドネシア共産党に対する自然発生的な反逆という同じ話を繰り返している。伝統に縛られた、神秘的な「土着民」という植民地主義の神話を復活させながら、シェイプリンはインドネシア国軍による事件の説明を無批判に垂れ流している。

ある範囲でいえば、大量虐殺は確かに長年にわたるインドネシアの共産主義者と非共産主義者との抗争のあらわれであった。1920年代からインドネシア民族運動は、共産主義者と非共産主義者に分裂してきた。共産主義者はオランダおよび日本からの独立だけではなく、インドネシア社会内部における革命を要求した。共産党はその勢力基盤を労働者と農民に置いたが、これらの社会層の自己意識の高まりはインドネシアの多くの中産および上流階級を恐れさせた。1920年代後半、スカルノは常に民族大団結に関心をよせ、共産主義者と非共産主義者の双方に反オランダ闘争において互いに協力するよう呼びかけた。そして実際、両者はしばしば協力関係を持った。インドネシア民族運動の指導者であるスカルノとモハマド・ハッタが1945年8月17日に独立を宣言したとき、彼らは新政府がインドネシア民族運動内部のさまざまな異なる政治潮流の全体を代表することができるだろうという期待をもっていた。また彼らは独立政府はインドネシア人民全体の生活水準を向上させることができ、それによって社会の内部にある階級対立を緩和させることができるだろう、とも考えていた。

長年にわたるオランダの植民地支配はインドネシアにさしたる経済発展をもたらしてはいなかった。1942年から45年にかけての短期間の日本による占領も貧困を深刻化させただけであった。国家の資源、とくに石油はそのほとんどが日本の戦争遂行のために奪奪された。インフラ建設のために多くのインドネシア人たちが無給労働を強制された。また女性たちのなかには性奴隷にさせられたものもあった。米その他の食糧の不足によって、いくつかの地方は飢餓状態にさしかかっていた。共産主義者、非共産主義者の双方を含めて1945年当時すべてのインドネシア民族主義者の緊急課題は貧困問題であった。すべての民族主義者は外国による搾取を終わらせる新しい政府の創設に希望を見出し、またすべての人が十分な食事と衣服を手にし教育を受けて民主的権利をもつ新しい社会の建設を夢見た。しかし、こうした経済的、政治的復興を開始する前に彼らがしなければなかったことは、戦争だった。日本軍の

撤退後、オランダ軍が再上陸してきた。インドネシア民族主義者は、オランダ政府とその経済的支援者である米国政府が再植民地化を断念するまで、1945年から49年の4年間にわたってオランダ軍との戦闘を行ったのである。

オランダに対する武装闘争のなかで、共産主義者と非共産主義者との対立が爆発する。1948年の中部および東ジャワでの戦闘、いわゆるマディウム事件である。1945年に独立を宣言した民族運動の指導者スカルノとハッタは、配下の若く、十分に組織されていない兵士たちに命じて共産主義者を攻撃させた。1948年、何千人もの共産主義者が殺害された。その多くは反共的な指揮官のもとにあった国軍部隊によるものである。マディウム事件は、オランダ軍による包囲という緊迫した事態のなかでさえ、民族運動内部には深い分裂が存在していることを示した。1948年時点でインドネシア民族運動はオランダ軍の侵略に敗北しつつあった。

スカルノとハッタという非共産主義者の指導者たちが反オランダ闘争の只中でも意識的に共産主義者を攻撃していることを見て、米国の外交筋はインドネシアは共産主義化されることなく独立されうるのではないかと考えるようになった。1948年マディウム事件の発生後、米国はオランダ政府に対して直接の統治を断念し、非共産主義者の民族運動指導者との交渉を行うよう指示した。1945年に宣言された民族の独立は1949年最終的に実現されたが、それは皮肉にも民族運動の団結した力によるものではなく、その弱さ（共産主義者と非共産主義者との分裂）によるものだった。

植民地支配後の時代、スカルノは共産主義者と非共産主義者との仲介をつづけた。その後、1965年までにインドネシア共産党は黨員数百万人を擁する巨大な政党となった。労働組合連盟、農民組合連盟など傘下の団体には、さらに数百万人のメンバーがいた。インドネシア共産党の勢力拡大を恐れる多くの非共産主義派の政治家と国軍幹部は、その拡大をいかに阻止するか策略をめ

ぐらせた。スカルノ大統領のバランス政治はますます不安定なものとなり、とくにスカルノの反帝国主義戦略（1963年にはじまったスカルノのマレーシアとの「対決」など）への支持を求めて彼が共産党にますます依存するようになるにつれて、不安定さは拡大した。1965年初頭までに非共産主義者たちはインドネシア共産党が権力の座に接近するのを阻止するためには、これ以上スカルノに頼ることはできないと考えはじめていた。国軍幹部らは、共産主義者の支配から国家を防衛するためには自分たちが権力を握るほかはないと信じていた。米軍が1960年代から70年代初頭にベトナムを共産主義から防衛しようとした、同じやり方で国家を防衛したのだ。つまりそれを破綻することによって、その意味では、1965年の大虐殺は非共産主義者がインドネシア共産党に対抗する手段として大規模な虐殺以外の方法を持つことに失敗したその表れである、ということもできるだろう。

1965年から66年の大虐殺の背景を理解するためには、この国内的な、また国際的な共産主義者と非共産主義者との抗争という政治物語が重要な意味を持っている。しかしそれだけでは十分ではない。それだけではどのようにして虐殺が発生したのか、具体的に誰に責任があるのか、そして生き延びた被害者たちがどのように被害に向きあってきたのか、を説明することはできない。インドネシアはこの1965年から66年の軍事独裁成立によって今日に至るまでの苦難を強いられてきたのであり、その苦難の一つは独裁によるテロ行為がすべて忘却されていくという苦難だったからである。

## 社会的記憶

スハルト独裁の32年間にわたって1965年から66年の大虐殺は「社会的記憶」、つまり人々の間で伝えられ、儀式などによって追悼され、あるいは書籍や博物館の記録に記されたり、記念碑が作られるような記憶、には含まれなかった。虐殺

の経験は多くの場合、個人の記憶のなかに止まり、あるいは一時的な会話のなかに表れるだけだった。スハルト自身、虐殺について語ることはなかった。自伝のなかでも虐殺への言及はない。スハルト体制下の国軍幹部がまれに当時、人々が殺されたことに言及することはあったが、虐殺の性格や国軍の関与について議論することは決してなかった。教科書にも記述はない。政府編纂の歴史書にもない。インドネシアのジャーナリストや歴史学者もこれについて調査したり、報告することはなかった。我々が知っている唯一の例外は、1967年に若い学生活動家ソ・ホクギによって書かれたバリでの虐殺の報告、そして人権運動家ジョピ・ラスットとボンケ・プリンセンが書いた1968年から69年にジャワ中部ブルオダディで起こった虐殺に関する新聞記事だけである。

歴史は勝者によって書かれる、という言葉はスハルトにもあてはまる。しかしこの言葉にはただし書きが必要だ。ピーター・バルケが言うように、「歴史はまた、勝者によって忘れ去られる」。スハルト時代に出された1965-66年の事件についての政府の公式出版物には共産主義者に対する大規模な暴力についての言及がない。例えばインドネシア大学のヌグロホ・ノトサント教授（彼は名目上、国軍の役職にも就いている）のようなスハルト独裁お抱えの歴史学者たちは、インドネシアの国史を書き換えて暴力にはまったく言及せずに共産主義者に対する暴力行為を正当化してきた。彼らの歴史記述の主な内容といえは、インドネシア共産党は1920年の創設以来、裏切り、暴力、そして虚偽に満ちていた、というものである。インドネシア社会はこの政党の存在を許さなかった、というのだ。スハルト時代の歴史書は共産主義者を血に飢えた悪魔として描きながら、反共主義者が残虐行為をはたらいた1965-66年の殺戮については完全に沈黙する。まるで何事も起こらなかったかのように。

我々がこれまで被害者の声を聞くことがなかった理由の一つは、国家による検閲である。スハルト体制下では被害者は「共産黨員」のレッテルをはられ、公に発言したり文章を公表することは

法律によって禁じられた。国軍に統制された議会が1966年に制定した法律は、インドネシア共産党だけではなくマルクス主義・レーニン主義の宣伝そのものが禁止された。つまりその言動に「共産主義的な」内容が含まれていることを理由に、国家が「共産主義者」と認定した人には言論の自由が認められないということである。その言動が暗号化されている場合でもである。

政府は「共産主義者」の親戚をも孤立させるのが最善だと考えた。1970年代中期には公務員からインドネシア共産党の影響を完全に取り去るために、いわゆる「環境浄化」諸法が立案された。政治囚、元政治囚のきょうだい、配偶者、子供を政府関係の仕事に雇用することも、応募することも禁じられた。政府は社会衛生論に基づいて公務員に対する取調べを行い（「精神イデオロギー検査」と名づけられた）、彼らを「清潔」と「不純」とに分類した。この二元的な分類がすべての市民に適用された。例えばパスポートを取得したい人は、三つの書面（地元の警察署から、地元の部落長から、そして地区長から）を準備し、彼女／彼は「清潔な環境」から来ているということ、つまり彼女／彼は「共産主義者」とは親戚関係にないということ、を証明しなければならなかった。

元政治囚は、国が発行するIDカードにスタンプを押され、厳しい差別的諸法の対象とされた。1970年代にほとんどの政治囚が釈放されると、政府は新たな法律を制定して彼らが世論に影響を与えるような私的セクターで働くことを禁じた。（その時点ですでに公職からは追放されている）1981年に内務大臣によって制定されたこの法律によって、彼らはジャーナリスト、教師、弁護士、その他政府が「戦略性をもつ」と考える職に就くことを禁止された。

スハルト政権は1965-66年の事件について、政府と異なる見解を提供するあらゆる出版物を禁じた。ベネディクト・アンダーソンとルース・マクベイによる9月30日運動の分析も禁書とされ、さらにこのインドネシアの歴史と文化に関する世界最高の専門家であるアンダーソンの入国が

禁止された。元共産主義者や政治囚によって書かれた本など、禁書の所持が見つかれば投獄されることになっていた。1980年代後半にはプラムディア・アナンタ・トゥールの論文を研究し、普及しようとしていたジョグジャカルタの数名の学生が裁判にかけられ、懲役刑を宣告されている。

1965-66年のテロについては、書かれた記録、歴史的分析、またインドネシア内での公の議論が不足しているために、多くの人にとってこの時代は謎に満ちており、説明のつかないものとなってきた。この悲劇を目撃している世代は、社会から孤立して生活していた人も含めて、ほとんどみなインドネシア共産党の党員あるいは同調者に対して虐殺や投獄が行われたということを知っている。「PKI」を捜して通りで暴れまわる群集のことや、工場や職場に兵士がやってきて「PKI」を逮捕したこと、近所の人や友人、親戚がいつの間にか行方不明になったこと、通りに死骸が転がっていたり船に乗せられて川にながされていたこと、学校や役場が拘留所になったことなどを覚えている。ほとんどの人が反PKIの魔女狩りが行われていたことを示す直接の現場を目撃しているのである。しかし、それについて書き記したり、公に発言するひとはいない。

優れた文筆家であるサチャグラハ・ホエリップは1972年のエッセイのなかで、大虐殺についての知識は口伝えに広まったと書いている。様々な話が口のにぼることはあったが、記されることはなかった。「奇妙なことに私たちは様々な話を聞いたことはあるが、新聞や雑誌に載っていたり、普段、国内外で活躍していて非常に有能で信頼できる記者が書いた記事や写真などはまったく見たことがない。」インドネシアの書籍ではめずらしく、彼は口伝えに聞きたいいくつかの話を簡潔に記している。「即座にめった切りにされた人々が川に流されている。体はまだつながっている場合もあれば、切断されているものもある。／目隠しをされた集団が海岸や峡谷に連れて行かれ、そして石と一緒に突き落とされた。／まず自分の墓穴を掘るよう命じ、そして彼らを射殺しその穴にしずめる。残された仕事は土を被せるだけ。／その

他…」ホエリップはこれほど多くの人が殺されたにもかかわらず、これらの話には確証がなく、繰り返し話されるうちに誇張されてきてもう誰も信じなくなってしまった。そのために虐殺事件などなかったのではないかと考えるようになる人さえ出てきており、こうした人々に何か働きかけなければならないと感じていた。「この国で本当にそんな大虐殺が起こったのだろうか、と疑っているのが私たちの実状ではないだろうか。」

テロは「公然の秘密」、周知の事実だった。だが加害者側からのものも含めて、それについての記録がほとんどないために、人々は自分の記憶にどれほどの意義があるのか知ることができなかった。例えば、自分の村で虐殺を目撃したある人は、他の村や他の地域で何が起こっていたのかを知らない。彼女／彼は自分が目撃した被害が他の同じような虐殺、異常事態の一部を構成していることを知らない。口伝えでしか伝わらないために、他の場所での出来事についての話は信用性が乏しくなる。その話を信じるべきか、あるいは根拠のない噂なのか確証がもてないのである。虐殺の責任は全体的にあいまいなままとなる。錯乱状態になっていたのは民間人だったのでは？ 軍も含まれていた？ 民兵組織がやっただけだろう？ いや両者が共同でやっていたのでは？

1965-66年の事件についての公の議論や調査の乏しさは、誰も暴力の規模を知らないということにもつながった。どれだけの人間が投獄されてから殺された、あるいは直接に殺されたのか、誰にも分からない。通常の推定では殺された人は数十万人とされている。相当数のインドネシア人、おそらく150万人ほどが政府によって「PKI」のレッテルを張られ、投獄されたと見られる。

スハルト体制の下で書かれた歴史によればこうした沈黙は、残忍な憎しみによって社会が分裂したあの時代、トラウマとなってしまったあの時代に対する集団的な後悔や羞恥心の表れだ、ということになる。テロについて沈黙するスハルトが唯一例外的に語った話としては、1971年にインドネシアのジャーナリストに対して述べたもの

であり、そこでは民間人が他の民間人を殺した、とされている。「民衆自身の行動によって、また長年にわたる狭い政治対立によって培われてきたグループ間の醜い偏見によって、多くの人が犠牲になった。」スハルトは大衆的な政治行動がもたらす危険性の一例としてこの虐殺事件に言及した。彼は国軍の虐殺事件に対する責任を不問に付すばかりでなく、民主主義を付与するにはインドネシア人は未だ未成熟すぎると言ってこれを非難して1965年以降つづけられている国軍による国家の支配を正当化したのである。

スハルト政権の正史によれば、記録されるほどの反PKIテロは存在しなかった。あったのはPKIによって国軍および非共産主義者の政党に対して行われた1965年10月のテロのみである。共産主義者はクーデターを企てることで自ら「反逆者」であり「裏切者」であることを証明した。PKIの「壊滅」は、6人の国軍幹部を拉致・殺害した9月30日運動に対する必要な措置だった。共産主義者は一挙に投獄され、政治の舞台から追放されねばならなかったのだ。PKIの壊滅を主導した国軍の行為は、インドネシアを強制的にソ連や中国と同様の共産主義国家にしようとした裏切りの攻撃者に対する自衛行為であった。軍は「国を守った」のである。

スハルト政権はPKIに対する国軍の攻撃を賞賛したが、しかし共産党の「壊滅」は通常の行政的対応によって実現されたものとした。すなわち国軍や警察がPKIメンバーを逮捕し、彼らを尋問し、9月30日運動とPKIへの関与の度合いによって分類し、そのうち彼らを釈放あるいは収監した、と。自然発生的で統制不能な醜い反共産主義者暴動がわずかに起こりはしたが、それ以外はすべては粛々と、血を見ることなく行われた。虐殺は、法的手続きに則って実行された政府の政策を越える「行き過ぎ」である、としたのだ。

スハルトは大統領の座に就くとすぐにこうした社会的記憶を作りだすために虐殺の記憶を消し去り、一方では失敗に終わった9月30日運動のクーデターの記憶を拡張しようとした。今日、イ

インドネシアの一般の人に1965-66年の事件について質問すれば、もっとも重大な出来事はルバン・ブアヤにおける国軍幹部の虐殺だと答えるだろう。スハルト政権はその後起こった数十万人の虐殺については沈黙したまま、このたった一つの事件のことを大衆に教えこんだのである。スハルトは9月30日運動を政権の正史の中心に据えた。ルバン・ブアヤには死亡した国軍幹部の実物よりも大きなブロンズ像とともに記念碑が建てられた。1969年に除幕されたこの記念碑は聖なるパンカシラ記念碑 (Monumen Kesaktian Pancasila) と名づけられた。パンカシラとは1945年にスカルノによって最初に発表されたインドネシア民族主義の「五原則」であり、これが公式の「国家理念」にまで高められ、国家に対する神聖な誓約とされたものである。記念碑は、このパンカシラがもっとも残忍に踏みじられ、そしてこの国軍幹部が高徳の殉教者になったこの場所を清めているのである。

この記念碑はスハルト体制にとってもっとも重要な儀礼を執り行う場所でもある。五年に一度、国民協議会 (MPR) の議員はその任期のはじめにこの場所に集まり、パンカシラに忠誠を誓うのである。また毎年10月1日にはスハルトと最高幹部たちが記念碑で儀式を行う。その日は国民の休日とされ、「Hari Peringatan Pancasila Sakti (聖なるパンカシラを記念する日)」とされた。記念碑のとなりには1992年に政府によって二つの出来事に関する大きな記念館が作られており、34のジオラマによってPKI党員たちが拷問と虐殺を行っている様子が生々しく再現されている。あらゆる手段をつかってPKIの悪事を広く知らせるために、スハルト独裁は將軍たちの虐殺に関する映画も作らせた。「The Treason of the September 30th Movement/PKI (9月30日運動/PKIの反乱)」(1984年)と題されたこの映画は上映時間4時間。学童に対して毎年上映を行うことが義務付けられていた。子どもたちは特別上映会のために集団で劇場に連れられていった。また毎年9月30日の夜にはテレビでも上映された。

記念碑、記念館、儀式、映画、そして教科書によって社会的記憶を意図的に形成しようとする試みはすべて9月30日運動を記憶に留めさせ、その後の出来事を記憶から消し去るために計画された。7人の將軍の殺害事件が大量虐殺、大量投獄を押し退け、これこそが国にとってもっとも恐ろしい災禍だったとされた。大量虐殺という恐ろしい悲劇が沈黙にせず一方で、スハルト体制はたった一つの個別的で、比較的小さな事件について熱心に追悼事業を行った。世間では人間でない巨大な悪魔としての「PKI」のイメージが、被害の記憶や被害者への同情を凌駕した。国家は民衆に対して、「PKI」に課されたどのような処分もその極悪さからすれば相当である、と考えるよう仕向けた。それを人間として考える必要はない。それは「PKI」なのだ、と。

スハルト時代に絶え間なく続けられた「PKI」批判は、虐殺行為に加担した者たちの精神衛生のために重要だったともいえる。この批判によって彼らは自分の行為が道義的にも正しかったのだと再確認することができた。「PKI」は極悪の巨大な怪物だったと絶えず思い出すことで、彼らは自らの行為が倫理的に疑わしいという考えを避けることができた。民間人も軍人もだが、加害者たちの沈黙はおそらく虐殺は何かしら誇ることのできないことであるという自分たちの意識を示しているのだろう。もし彼らが虐殺について発言しなければならぬとすれば、その野蛮な行為と自分たちが誓ってきたパンカシラ(とくにその第二原理「人間性」)との整合性についてより深刻に考えねばならなくなる。

大虐殺を唯一はっきりと取り上げたのは小説であった。ホエリップやウマル・カヤム、アーマド・トハリ、アジブ・ロシディなどスハルト時代に有名になった多くの反共作家たちが作品のなかで虐殺や大量投獄を取り扱った。これらの作品で興味深いのは、それがいかに政府による公式の歴史叙述を肯定したり否定したりしているか、という点である。その小説がPKIに対する暴力について守られてきた沈黙を破るときには、その沈黙がもう一度完成されるようなやり方で破ってい



る。政府の宣伝とは異なり、こうした作品は大量虐殺が発生したこと、そして確かに国軍が直接これに関与したことを認める。だが、この公然化は虐殺を正当化するためのものである。彼らは大虐殺は合理的に理解できるものであり、むしろ誇るべき行為だったとする枠組みを提供するのである。

「generation of '66 (1966年世代)」という作品で始まる文芸雑誌「Horison (地平)」に発表された虐殺に関する短編小説について見てみよう。その編集者たちはみな新秩序体制下で主要な文化人だった人たち。モクタル・ルピス、H.B.ジャシン、タウフィク・イスメイル、アリーフ・ブディマン、ゴナワン・モハマドといった人々である。彼らは自分たちを「普遍的ヒューマニズム」の体現者と宣言し、芸術の自由を侵害する狭い政治イデオロギーに反対していた。ヒューマニストたらんとする彼らは、大虐殺についてもいくらかの憂慮を表明した。「Horison (地平)」に掲載された短編のほとんどは、その主人公自身が虐殺に加わっており、しかしその暴力性に嫌悪感を抱いている、というものである。「普遍的ヒューマニスト」たるこの著者たちは、虐殺を被害者にとっての悲劇としては描かない。自らの人道的信念と殺害行為との間で苦悩する加害者の悲劇として描くのである。

「Horison (地平)」に掲載されたウサマの「War and Humanity (戦争と人間性)」では、自主的に国軍の取調べを手伝った民間の若者が描かれる。PKIがテロによる支配を始めようとしていると完全に信じた彼は、この政党を壊滅するために何かしたいと考える。しかし自分を教えた教師や、世話になった医者、同級生の女性が投獄されていくなかで、彼は深く困惑する。もはや犠牲となっているのは抽象的な敵ではなく、友人として接してきた人々である。ワヤン劇のなかで踊っていたその女性の姿を思い出す若者。兵士が医師に拷問をしているなかで、彼は「吐気がした」ことを認める。そこですぐに彼は読者に対してこう述べる。自分は原則のうえでは拷問の必要性を認める。だが実際にそれが行われるのを見る

ことが耐えられなかったのだ、と。吐気がしたのは「彼にすまないと思ったからではなく、念のために言うておこう、行われていることに反対だったからでもない。拷問されている人を見るのに慣れていなかっただけなのだ。」彼は自分のなかに本能的な思いやりの感情を感じても、それがPKIを「壊滅させる」ということに含まれる何がしかの問題性に対する反応とは考えず、ただ自分自身の問題だと考える。彼は暴行を見ていられなかった自分自身をのろい、より強靱な人間になりたいと熱望する。「もしも国軍幹部がみんな自分のようだったなら、全体の状況はまったく正反対になってしまっていただろう。」彼は拷問や処刑を行う者を賞賛し、うらやましくさえ思う。「ソロ地方の共産主義者たちに生きた『教訓』を与えたあの決然とした兵士たちがいなければ、そうあのダンサーのスリや教師のイブ・Y、医師のXなどに与えられたようなあの『教訓』がなければ、9月30日運動の壊滅は未だに実現していなかっただろう。」主人公は国家の公式叙述の正当性を確認する。PKIは攻撃する側に立っていたゆえに、「壊滅」される必要があった。すでに拘束されていたダンサーや教師、医師たちの秘密処刑は、まさにこの短編のタイトルが示すように、戦時であったからという理由で正当化される。国軍は無防備な市民に対して一方的な攻撃をしてはいない。軍は戦時下にあったのだ。犠牲者たちの悲劇や人的な大惨事があったわけではないのだ。

「Horison (地平)」の編集者たちはこのウサマの短編に対する序文のなかで、この著者は個々の人間を「個性をもった」存在として見ており、「他者に対する思いやり」を紡いでいる。著者は他に抜きん出た「すぐれた感性の持ち主」だ、と書いている。暴行のなかで主人公のなかに沸きあがった嫌悪感は、このようにして人間性の現われとして賞賛される。同時に編集者は反PKIの暴力を「必要悪」と考えている。こうして、あわれみ深い作家を自認する人々によって人間性の回復が行われ、大量虐殺が承認されていったのである。

1965-66年の間に本当に「戦争」があったのか。今、こう聞かれれば加害者たちの多くは自分の行

為を擁護するために、まるでPKIに参加していたすべての人が政治的対立者を殺す準備をしていたかのように、あの時は「殺るか殺られるか」の時代だったと答えるだろう。これが彼ら、加害者にとっての事件の理解である。だがその内容の妥当性は疑わしい。たとえスハルト体制による事件の説明に則ったとしても、あの時代を戦時と見なすのには無理がある。1965-66年のPKI「壊滅」の過程で、国軍は武装集団との間でのいかなる交戦もおこなってはならず、国軍側に負傷者が出たとの報告もない。「壊滅」された当時、PKIはいかなる抵抗も見せていない。もし抵抗があったなら、これほど簡単に、短時間で「壊滅」されてはいなかっただろう。PKIとの間でおこなわれた唯一の戦闘は、1968年東ジャワの南ブリターでのものであるが、ここでもPKIのゲリラ部隊はさしたる攻撃をおこなわなかった。ソ・ホクギは1967年バリでの虐殺についての記述のなかで、この虐殺は戦争というよりもスターリン体制下のソビエト連邦で行われた粛清のようだとしている。

「戦争では、互いがいかに不均衡な形で対峙しようとも、両者の間には小さくとも必ず相手を殲滅する、あるいは自己を防御するための努力がなされる。この事例の場合、大量殺戮あるいは大虐殺という用語がもっとも適切であろう。」

当時の状況を戦時として描いたウサマの短編を考えてみよう。ダンサー、教師、医師はすでに囚人となったのちに処刑されている。そして彼らは取るに足りない理由で処刑された。二人の女性が処刑された理由は、ゲルワニはルバン・プアヤの虐殺に関与していない、とスカルノが述べたことに兵士たちが腹を立てたからというものだった。ほとんどの犠牲者が囚人であったことを考えても、これほどおかしな戦争はない。(因みに、戦争捕虜の処刑は戦争犯罪である。)

バリ出身の作家、プトゥ・アルヤ・ティルタ

ケディリー帯は共産主義者にとって安全ではなくなった。(奇妙なことに、彼らが何の抵抗もしない場合だけはその例外だったのだが)共産主義者の多くはスラバヤ(東ジャワ州の州都)への避難を試みた。あるいはケディリーの町にあるコディム(国軍地区司令部)に保護を求めた。しかし、あまりに多くの人々が保護を求めたためにすでに監獄は満杯であり、ここも安全ではなくなっていた。結局、国軍は彼らをトラックに乗せ、クロ

ウィリヤの短編「When People Become Numbers (人々が数になるとき)」は、虐殺を「將軍たちのリストにのった人を数える」過程として描いている。物語の主人公はPKIの影響のない村の若者で、彼は友達といっしょに村の夜警をしている。ある夜、別の村からこん棒や槍、刀やナイフをもった15人ほどの若者の集団がやってくる。彼らは「PKI」を殺そうとしており、名簿をもっている。「今晚の割り当ては、この村から3人だ」といって彼らは名簿に名前のある男の家に行き、その男たちを引きずり出して殺す。ティルタウィリヤが描くこうした虐殺は殺し屋によるものであり、戦争のそれではない。もし本当に戦争があったのなら、たくさんの武勇伝が文学作品のなかでも描かれたはずで、ウサマやティルタウィリヤの話のように一方的に管理下に置かれた暴力ではないはずである。

実際に管理下におかれた状況での虐殺が例外ではなく、標準であったことを示すいくつかの根拠がある。概して虐殺に関しては沈黙が支配しているが、相当数のノンフィクションの個人的証言が出版されてもいる。はじめに発表されたのは、ドイツ在住のインドネシア人、ピピット・ロキアットによるものである。言うまでもなく、1984年に出された彼のエッセイはスハルト体制下のインドネシアで出版されることはなかった。彼は当時、高校生として生活していた東ジャワの小さな町ケディリでの事件の記憶について書いている。9月30日運動の事件があつてからはじめの2週間はむしろ静かだった、と彼はいう。PKIの支持者に対しては反乱に関与していたのではないかと追及が行われたが、ケディリでは暴力にはいたらなかった。彼らに対する攻撃が開始されたのは10月の後半からで、その時にはPKI支持者らは反乱の準備をしてはいなかった。何人かのPKI支持者は民兵組織の襲撃によって殺され、その他も軍に拘束された後に殺された。

ック山へと運んだ。(山への道は途中、第一公立高校の場所を通る)国軍が彼らに何をしたのは定かではない。分かっているのはトラックは出発する時には満杯だったが、帰ってきたときには空だったということだ。また、民族主義団体や宗教団体がコデムにやってきて、共産主義者の誰それを引き渡せと要求すればコデムはそれに応じていた。コデムは運搬用の乗り物さえ持ってくれば(必ずバイク以外のもの)、よるこんで共産主義者を引き渡した。

最大のイスラム組織Nahdlatul Ulama (NU)に所属する東ジャワの青年団体Ansorは1996年にある本を出版した。この本のなかでAnsorはPKIの「壊滅」に参加したことを認め、ただしすべての行動は「国軍の部隊の下であり、別に行ったこと」は決してないと説明した。失敗したクーデターの後、AnsorはBanser (Bantuan Serbaguna：多面的支援隊の略称)という名の民兵組織を創った。その本「Banser Berjihad Menumpas PKI (PKI壊滅の聖戦を闘う Banser)」はその戦略に関する公式説明にしたがってPKIの「壊滅」について描いているが、全体としては抽象的な表現にとどまっており、虐殺の実行過程についての詳細な説明は載っていない。ただこの本にはケディリに近いケブンでBanserのリーダーをしていた人物の話が載っており、そこに虐殺に関する記述が見られる。この人物の記憶によれば、同地区の約6,000人の「PKIたち」が一斉検挙され、プランテーションのなかに拘留された。拘留されるとすぐに、グループごとに連れて行かれて処刑された。「毎晩、コデムからの命令文書が届くと、Banserが警戒しながらPKIをクレンセンの森にあるSumbertigolに連れて行った。大体30人か40人ずつだった。クレンセンの森に着くと、一人ずつ殺されて、そして大きな墓穴のなかに埋められていった。」

また西ヌサ・テンガラ州ロンボックの元Ansorリーダー、ファツラーマン・ザカリアは1997年に本を出版し、同州でのPKI「壊滅」について書いている。彼の説明によれば、10月下旬から11月にかけてたくさんのPKI党员たちが一斉検挙された。すべての刑務所が一杯になり、軍は講堂やビルなどを緊急の拘留所として使用した。軍は尋問を行い、逮捕者を分類した。ザカリア自身も600人ほどが拘留されていた製氷工場跡で取調官として働いた。「1966年の4月から8月までこ

の仕事をした。グループCに分類された者は一時的に釈放されたが、このグループが一番多かった。彼らには週一回の報告が義務付けられた。1966年8月の終わりにかけて筆者が拘留所を訪れると、収監されている者の数がどんどん減っているのがわかった。何日かしてから筆者は小売業者の『在庫一掃大売りだし』のような新しい政策が始まっているのだ、と気付いた。」ザカリアは1967年初めにはしばしば夜間に逮捕者たちが10人から15人ずつ房から連れ出され、自分たちの墓穴を掘らされていた、と説明している。彼は「cuci gedung (ビルをきれいにする)」という婉曲表現を使っているが、それは実際には裁判なしの、しかもなんらの犯罪も犯していない者の処刑を意味している。婉曲表現を使っているが、ザカリアのように加害者が事実を語ることは稀である。

正史が虐殺について完全に沈黙しているなかで、小説や個人的な語りのなかからわずかな情報が浮かび上がる。それによれば虐殺の主な形態は、被逮捕者に対する裁判なしの処刑であったようだ。つまり大量虐殺は大量逮捕に次いで起こったことになる。この虐殺がどのように生じ、誰に責任があるのかを明確に理解するためには更なる調査が必要である。現在ある情報から分かるのは、PKIに対する大衆的なヒステリー状況を作り出し、民兵組織に虐殺を実行させた責任はスハルト指揮下の国軍にあるということである。スハルト体制によって広められた(まれに虐殺の存在を認めた上でなされた)説明、つまり民間人が錯乱状態に陥ったという説明は完全に間違っている。

人民民主党 (PRD)に代表される1990年代中期の急進的運動の高揚のなかで、新秩序体制の支持者の間には彼らの歴史叙述が若い世代には受け入れられていないという不安が起こった。スハルト

ト体制にとって人民民主党的の登場はインドネシア共産党(PKI)の再来のようなものだった。人民民主党はその文書のなかで1965-66年の虐殺問題をあげ、国軍に責任があるとして告発した。新秩序体制の支持者たちはより多くの宣伝文書を発行して、PKIがいかに恐ろしい存在だったか、その「壊滅」がどんなに偉大なことであったかを広めなくてはならないと感じた。だが親の世代とは違い、若者たちにはテロに対するあの恐ろしい記憶はなく、国軍によるさまざまな虐殺行為の知識と合わせて、彼らは政府による1965年の悲劇の説明の有効性に疑問を投げかけ始めた。

1965-66年の事件に関する社会的記憶は国家の宣伝と被害者の沈黙によって形成された。素晴らしいおとぎ話は社会的記憶によって創られる。…PKIという名の巨大で極悪で醜い怪物が、善良で清廉な民衆を脅かす。恐れを知らない勇敢なスハルトに率いられた、偉大で英雄的な国軍がそれを打ち倒した。…遠足でルバン・ブアヤに連れていかれ、教科書でそんな話を教え込まれる子どもたちのなかには、今でもそんなおとぎ話を信じている子がいるかもしれない。だが、理性ある大人にとっては、もはやそれを信じることはできない。すでにスハルト体制の正史に対しては懐疑的な見方が広まっている。反PKIの暴力の加害者によるいくつかの出版物によって、スハルト指揮下の国軍が人道に対する罪を犯したことが指摘されている。「民族大団結」の名のものでスハルトの正史に固執することを止め、当時の出来事に関する記憶の多様性に誠実に向き合う必要がある。被害者が何も言っていない、と主張することはもはやできない。国軍諜報機関が国史の神聖な事実だといってでっち上げた話で、民衆が満足するなどということはもうないのだ。

## オーラル・ヒストリー

1965-66年のテロを取り巻く秘密や嘘と格闘するなかで、我々はオーラル・ヒストリーを調査することによってこの問題に取り組む道が開け

るのではないかと考えるようになった。だが、オーラル・ヒストリー、インドネシア語で言えば *sejarah lisan* は多くのインドネシア人にとって馴染みのない用語だ。実際、広く認められている歴史とは、文書記録に基づいて研究された過去のことであり、オーラル・ヒストリーなる言葉は矛盾していると思われるかもしれない。実際、我々が口頭での聞き取りに基づいて歴史を記していると告げると、相手から疑いの眼差しを向けられるのが普通だった。「彼らの言っていることが本当だと、どうして言えるのか。」もちろん、人間の記憶は必ずしも正確ではないというのは理解できる反応である。過去の経験について個人が語る話には、多くの歪みや誤解が含まれることが多い。だが、こうした反応、それ自身のなかにも歴史研究、歴史記述に関する歪んだ理解が映し出されている。もし私たちが国立公文書館で、あるいはオランダの公文書館のなかで歴史研究をしているのだと告げれば、その人は「あなたはその資料が真実を記していると、どうして言えるのか」とは問い返さないだろう。すこしでも深みのある研究をしたことのある歴史学者ならみな、こうした公式文書も信頼に足らないことがしばしばあることを知っているにも関わらず、多くの人々は政府の公式文書や新聞は正しいという信仰を社会的に植え付けられている。それ自身、個人の記憶と同様に多くのバイアスや歪みを含んでいるにも関わらず、インドネシアに限らず現代世界の多くの人々が国家の公文書を歴史的真相の宝庫として物神崇拜している。

欧米諸国ではすでに1960年代からオーラル・ヒストリーが広く知られ注目されており、主に周縁化された、抑圧された、あるいは犠牲を強いられた社会集団の歴史を復元する手法として用いられてきた。その基本発想は、歴史記述は単に大統領や国王、大臣らに関するものだけであってはならず、一般の人々、その意識や視点、感覚などに関する事柄も含まなければならない、ということである。この「下からの歴史」を記述するにあたっては、国家の公文書や文書記録からは多くの情報を期待することはできない。直接に当該の社会集団、例えば労働者、農民、あるいは難民た

ちのところへ行き、彼らと話をしなければならない。ポール・トンプソンが書いているように、オーラル・ヒストリーは「下から新しい証拠の存在を導入し、歴史的考察の観点を転換させて新しい観点を開き、これまで歴史学者の前提となっていた、あるいは当然と思われていた判断に再考を迫り、無視されてきた人間集団への認識をもたらす」ことによって歴史記述の性格そのものを一変させた。「…歴史記述それ自体の視野が拡大され、豊富化された。そして同時にその社会的意味が変化した。一言でいうなら、歴史はより民主的になった。」

1960年代の歴史学者は、「上からの歴史」を研究するためにもオーラル・ヒストリーは有益だと考えるようになった。かつての政府高官のインタビュー集など、歴史的なオーラル・ヒストリーに属する古文書が存在している。こうした資料から政府の外交政策の決定などの政治史を解明することが彼らのオーラル・ヒストリーの目的である。これらのインタビューによって、政策決定過程の背景や国家機構の内部における個人間の力関係のダイナミズムを考察することができる。口述での聞き取りから得られる情報は、歴史学者が公的な文書記録の背景や伏線を理解する助けになる。こうした観点から取り組みを進めている人々は、自分たちでこれを「エリート・オーラル・ヒストリー」と呼ぶ。

多くの人がオーラル・ヒストリーに取り組みはじめると、それはより厳密なものとなっていく。例えば広く知られているところでは、聞き取り技術に関する知識などがそうだ。専門的な歴史学者だけでなく、たくさんの人々がオーラル・ヒストリーに取り組むようになった。1970年代にはオーラル・ヒストリーを専門に扱う学術雑誌が創刊された。(1973年創刊の*Oral History Review*など) 今日までに多くの国で数多くのオーラル・ヒストリーに関する書物が出版されている。

他の国々で多くの歴史学者がオーラル・ヒストリーを歴史学における正統な一分野と認める

なかで、インドネシアの歴史学者たちはその多くがこれを見捨ててきた。インドネシアの大学でオーラル・ヒストリーが教えられることは普通無い。これまでに試みられたオーラル・ヒストリーの研究プロジェクトはごくわずかである。国立公文書館が前述した「エリート・オーラル・ヒストリー」の枠組みのなかでいくつかの口述インタビューを行っているが、その対象はかつての政府高官に限られている。こうしたことから分かるのは、インドネシアの歴史学者はオーラル・ヒストリーを文書記録の「すき間を埋める」ために必要だと考えているだけだ、ということだ。聞き取りは副次的、あるいは補足的なものと考えられている。彼らは聞き取りする相手を文書記録と同等のもの、いわば話す本のように考えている。もっといえば、彼らにとって聞き取りすべき相手とは、国家を代表するような人物たちのことなのである。

オーラル・ヒストリーという学問分野は私たちに、聞き取りよりも文書に重きをおくというあり方は逆転しうる、ということを教える。聞き取りを最重要資料とし、文書を「すき間を埋める」補助として利用することもできるのである。語られる話を文書よりも正確なものと思ふことも可能なのだ。文書が含んでいるかもしれない事実以上のものが、語りに含まれていることもあるのだから。またその語りが、個人のアイデンティティについての本質的な疑問に関するものだと考えられる場合もあるだろう。我々が聞き取りを最重要と位置付けるなら、聞き取りを簡単で単純なもの、あるいは歴史学者ならこれまでの取り組みを見ずともすぐにできるものと思わずに、オーラル・ヒストリーの方法論についての深く学んでおく必要がある。

インドネシアで一般の人々に対する口述での聞き取りに熱心に取り組んできたのは、インドネシアを研究する海外の研究者たちだった。オーストラリアのアントン・ルーカスは、現代インドネシアのオーラル・ヒストリーをもっとも前進させた人物といえるだろう。彼は多くの人への聞き取りをもとに1991年その著書「*One Soul, One Struggle* (一つの魂、一つの闘争)」を発表し、

またオーラル・ヒストリーにいかに関わり合っていくべきかについてもさまざまな文書を書いている。ピーター・カーレイとロバート・クリブの諸著作もその多くを口述の聞き取りに拠っている。またインドネシア人によって初めて独自に取り組みられたオーラル・ヒストリーの調査プロジェクトも、国外でのものだった。著述家で元政治囚のハースリ・セティアワンは、ヨーロッパ、ベトナム、中国で約50人の「65年以前世代」の亡命者に聞き取りを行っている。

我々が知る限り、インドネシア人によって書かれたオーラル・ヒストリーに基づく最初の本は日本の戦争犯罪に関するもので、プラムディア・アナンタ・トゥールによる1943-45年の日本軍「慰安婦」に関する名著「Perawan Remaja dalam Cengkeraman Militer (軍に捕われた10代の少女たち)」である。1970年代、政治囚として離島であるブル島に送られたプラムディアは、その島にたくさんのジャワの女性たちが暮らしていることに驚いた。話を聞くと、彼女たちは10代のころに日本で教育を受けられるという約束でジャワから連れ出されたことがわかった。彼女たちは日本に行くことはなく、何もわからないまま日本軍基地に連れて行かれて性奴隷にされた。戦争が終わっても、彼女たちは恥辱のあまりジャワの家族のもとに帰ることができず、ブル島に残ることを決意しこの島の先住民と結婚した。プラムディアと仲間の政治囚たちは1970年代にこの女性たちに聞き取りを行い、これを書き記したのである。

ブル島の元「慰安婦」への聞き取りのなかで、プラムディアは人類の経験の膨大な部分は文書記録の外にある、ということに気付いた。日本軍関係者は少女たちの拉致や奴隷化についてどんな文書も作成していないであろうことから、彼は口述による証言に重大な意味があると考えた。彼は1940年代前半に関する文書を見れないことを非常に残念がった。囚われの身である彼には宗教書以外、すべての文書の閲覧が禁止されていたのだ。それでも彼は紙と鉛筆を所持することを特別に許可されるという幸運に恵まれた。彼は日本の

占領軍政府は自らの犯罪に関してはどんな文書記録も残していないことに思い至った。「はじめから彼らの行為の形跡は消されていた。」日本軍は自らが女性たちを奴隷にしていることについて、公式の発表をしてはいない。だが結果としてはジャワの人々の間ではそれは、プラムディアによれば、「公然の秘密」になったのだ。公文書を作成する当の機関によって犯された犯罪を調査するためには、口述での聞き取りがどうしても必要だと彼は考えたのである。

プラムディアの考えは正しかった。慰安婦に関する日本当局の記録は非常に乏しい。日本政府の公式文書を調査した日本の歴史学者田中利幸は、性奴隷に関する記録がほとんど残されていないとしている。残された記録は単に基地付近に軍が「慰安所」を開設したことを記しているのみで、女性たちを集め、強姦し、牢に閉じ込めた暴力の具体的方法については記されていない。こうした公式文書を鵜呑みにすれば、なんら犯罪行為は行われていなかったと考える者もでてこよう。それらはみな正当な理由に基づいて行われた行政手続として記されているだけなのである。1940年当時のある軍事文書に記されているように、日本軍幹部にとって慰安所は「兵士の荒くれた気持ちを癒し、低下した士気を統制するためのものだった」のであり、それによって「略奪、強姦、捕虜の殺害」(1937年南京でこうした行為が繰り返された)などの犯罪を防止するためのものだったのである。つまり慰安婦のところへ行くというのは、「道徳心を高め、規律を維持し、犯罪と性病を防止する」ことを意味した。また別の軍事文書では女性を拉致したり、虚偽の約束によって連れ去るなどする「不適切な人材手配業者」が批判されている。これらの公文書からすれば、慰安婦の供給決定は人道的措置のようにみえる。

日本政府はいまだ多くの戦争中の軍関係文書を機密扱いにしたままである。田中によれば「重要な文書の閲覧が制限されていることによって、この問題に関する十分な調査を行うことは非常に困難となっている。」歴史学者にとって問題なのは、日本の公文書が壟にまみれている、という

ことではない。問題は、それらの文書は穴だらけだ、ということだ。これらの文書から慰安婦たち自身の経験を理解することはできない。その経験を知るには、生き残っている元慰安婦たちの話を聞く以外にはない。田中はその著書の多くの部分を元慰安婦の女性たちの証言に基づいて書いている。オランダ領東インドの慰安婦に関する章では、多くの資料とともにプラムディアの本が引用されている。(当時この本はまだ出版される前の原稿の段階だった。)

プラムディアはブル島で自分がやっていることがオーラル・ヒストリーだとは知らず、また自分がオーラル・ヒストリーの本を書いているという認識もなかった。彼はそれを「人道に対する罪」についての単なる「記録」と「情報」を集めたもの、として発表した。自分自身も馴れ親しんできたような歴史の本に書かれた非個人的な言葉を利用するのではなく、彼は個人からの言葉を選び、それをインドネシアの若者たちへの手紙として発表した。その冒頭には次のようにある。「あなたがたにこの手紙を書く私の気持ちは重い。」プラムディアは10代の読者たちに対して、1940年代に同じ10代だった少女たちにとって、ジャワから連れ去られ性奴隷にされるということがどんなことだったかを、しっかりと想像してほしいと願ったのである。彼自身はこの本を歴史書ではないとしたが、この本は当然オーラル・ヒストリーの業績として認められる、すばらしい「情報」の集成の書である。

歴史学者はプラムディアと彼の仲間の政治囚によるこのブル島の女性たちの記録に多くのものを負っている。この政治囚たちが当時、強制労働のなかで生きるために闘争していたことを考え合わせれば、この調査への献身は瞠目すべきものといえる。インドネシアでもっとも優れた歴史書の一つであり、また慰安婦に関する唯一のこの本が、スハルト体制下であらゆる書物の閲覧を禁止させたブル島の政治囚によって書かれたという事実は、歴史研究を生業とするインドネシアの研究者にとってある種、恥じ入るべきことといえるだろう。

## 方法論

この本を支えるオーラル・ヒストリー調査は集団的に行われた。2000年の冒頭から、「人道のためのボランティア・チーム (TRuK)」からの10名のグループは会議を開始し、当時この団体の代表を務めていたカーリナ・スペルリとともに調査に向けた議論をおこなった。我々はこの自主的グループのアドバイザー兼コーディネーターになった。当時、この「ボランティア・チーム」は主に1998年5月のジャカルタ暴動で家族を失った人々への支援を行っていた。彼らは被害者に寄り添ってカウンセリングを提供し、また目撃証言を集めることで、なぜ、どのようにこの暴動が発生したのかの全体像を明らかにしようとしていた。誰もオーラル・ヒストリーに関する専門的な経験をもってはいなかったが、我々が見るところでは彼らは適切な聴き手としての資質を備えていた。彼らは他者の話を辛抱強く聞き、苦痛に満ちた話にも耐える精神的強さ、また暴力の被害者に向き合う誠実さを持っていた。彼らは被害者と対話をすることができる。私たちはぜひ彼らとともに調査を進めたいと思った。我々の経験では、最悪の聴き手というのは大学生や教授などで、こうした人々は自分は何んでも知っているとか、知りたいことは本を見れば書いてある、と思いこんでいる。その傲慢さのせいで、そうした人は適切な質問を発し、一般の人の話をしっかりと聞くということができない。よき聴き手というのは、人間相互の関係についてしっかりと理解していなければならない。

我々を含めて聞き取りを行ったのはすべてボランティアであった。我々は研究費を得たからではなく、この調査の重要性に確信をもっていたがゆえにこれをはじめた。この調査は、自分の社会の歴史をしっかりと理解したいと願い、国家のプロパガンダによるその単純化や虚偽を越えて進みたいと願う1965年以降世代の努力を表現したものである。

この10人のボランティアのために、まず2ヶ月

のオーラル・ヒストリーに関するトレーニング・コースをおこなった。週に少なくとも一度はミーティングをもち、たくさんの論文や本を読み、調査計画を作成し、聞き取りの方法についての議論を重ねたうえで、質問内容を決めていった。このトレーニングは調査員が1965年に関する歴史的な文献、とくに海外で出版されながら国内では禁止されていたり手に入らなかったものを読むために非常に重要な意味をもった。(このトレーニングのためにいくつかの資料を英語からインドネシア語に翻訳した。) ボランティアのうち歴史学者の一人を除いた残りのメンバーはみなこの事件に関してスハルト体制による説明しか知らなかった。彼らは1965年以降に生まれ、スハルト時代に学校生活を送ったのである。彼らはスハルト独裁体制の崩壊に立会っており、この政権の腐敗、冷淡さ、暴力性を十分理解していた。だがスハルト体制成立に際してのテロ行為についてはほとんど何も知らなかった。このテロ行為の犠牲者のことについても、誰も聞いたことも気にとめたこともなかった。このボランティアのメンバーたちはスハルト体制に反対して敢然と闘った人たちだったが、1965-66年の事件については政府のプロパガンダを内面化していた。つまり、スハルトは当然、合法的な形で政権についたのであり、暴力的で危険な無神論者な共産主義者は「根こそぎ」壊滅させられる必要があった、というものである。彼らは大虐殺や投獄については、ぼんやりとした噂として知っているだけだった。

トレーニングはオーラル・ヒストリーの方法を習得するという意味でも重要だった。口述での聞き取りといえば、相手の顔にマイクを向けて話してもらえばいいのであり聞き手が議論を主導する必要はない、と思っている人もいるが、それは正しくない。聞き取りは双方向的なものであり、二者間の相互作用によるものである。聞き手あるいは語り手の一人語りではだめなのだ。聞き手は注意深く、慎重に話を聴き、そして話を深める方向を探りながら、質問を続けなければならない。聞き手は黙っているだけでも、会話を乗っ取ってもいけない。聞き取りを受ける相手に対して適切な問いかけをしなければならない。実際の聞

き取りには一定の繊細な技術が必要なのである。

我々はボランティア・グループと議論し、聞き取りの対象を元政治囚とその家族とすることにした。人生のなかで同じような経過(つまり1965年以前、逮捕、取り調べ、投獄、解放、その後の人生)を経てきた人々の個人史を集めて、まとめ上げることをその目的においた。

トレーニングを終えると、我々とボランティアたちは意を決して聞き取りに取りかかった。まずジャカルタにいるこれまでも知り合いだった人々、友人や親戚、近所の人などからはじめ、次に彼らが紹介してくれた人々へと聞き取りを広げた。二ヶ月後にはジャカルタの外へと調査を広げることになった。学んだことを共有し調査状況を把握するために、我々は普段は週一でミーティングをもった。毎週のように調査員たちは新しい問題に直面した。ほとんどが技術的な問題で、たとえば恐ろしい経験を語って非常に感情的になっているときにマイクをどこに置くべきか、というようなことだった。こうした問題に適切に対処するために定期的なミーティングをもち、皆で議論した。

たいていの場合、録音インタビューをはじめる前に相手との面識を持つために一度は会うようにした。事前の顔合わせは、我々が何者なのか、その目的、聞き取りでどんな話したいのか、を相手に説明するために重要だった。またそれは我々がその相手にどんな聞き取りをするか、を決めるためにも重要だった。どんな質問を中心にするべきか、どんなテーマを話してもらうか、といったことである。聞き取りの後には、これで十分かどうか検討する。もしまだ個人史としてはっきり聞けていない部分があったり、さらに詳細に聞くべき話題があったりした場合には、もう一度聞き取りをした。調査終了時点で、我々は260人に対して聞き取りを完了した。

なかには録音されるのを好まない人もいた。その理由はいつも同じ、恐怖、だった。スハルト体制は崩壊したが、いまだ国軍が大きな権力を握



っており、いわゆる「reformasi (改革)」派といわれる政治家も実際には長年スハルトに忠誠を尽くしてきた昔からの保守的人物たちであることを彼らは知っていた。わずかだが聞き取りを拒絶した人もいた。そうした人々は暴力によって深刻なトラウマを抱え、国軍をいまだに非常に恐れており、個人的に私たちと会話することも嫌った。

調査員たちはテロのサバイバーたちへの聞き取りをするなかで、この人々が自分たちの社会の歴史から、あるいはその家族の歴史からさえも無視されてきたことに怒りを感じていった。調査の課程で調査員の多くが自分の家族のなかにもあった秘密を知るようになった。例えばある調査員は、東ジャワの実家に帰った折、1965年に何があったのかと祖母に尋ねた。祖母の反応に彼はとても驚いた。祖母はその時はじめて、彼の祖父が当時インドネシア農民戦線 (BTT) の地区代表で、1965年後半に行方不明になったのだ、と語った。家族はいまだに祖父の行方を知らない。祖母はずっと黙って、祖父が生きていつか帰ってきてくれることを願っていたのだ。また別の調査員は叔父が元政治囚だということを知っていたが、彼の個人史については詳しい話を聞いたことがなかった。別の調査員がその男性への聞き取りを行ってはじめて、彼は自分の叔父さんの経験の全体を理解することができた。また別の調査員は1965-66年にかけて中部ジャワで自分の親戚がたくさん殺されたことを知った。それまで彼の家族はその話をしたことがなかった。

我々がアブドゥラ・ワヒド大統領の任期中にこの聞き取りを行ったのは幸運だった。この時期、旧体制の力はもともと弱まっていたのである。1999年10月から2001年7月までの短いワヒド政権の期間、元政治囚たちは1965年以来、はじめて自由の空気を吸うことができた。ワヒドはいくつかの前例のない態度を見せた。彼は自らが属するイスラム組織Nahdlatul Ulamaが1965-66年の虐殺に加担していたことに関して被害者に謝罪した。またマルクス主義・レーニン主義を非法とした1966年の法律を廃止することを提案し

た。さらにプラムディア・アナンタの家へ数度の訪問を行った。1965年の被害者たちは、はじめて国家による重圧が取り払われたように感じた。さらに政治囚の天敵である国軍は混乱に陥っていた。ワヒド大統領は国軍の幹部人事にも口を出したし(例えば、スハルト派のウィラント将軍が罷免された)、米国議会は1999年9月東ティモールで国軍が焦土作戦を繰り広げた後、インドネシアに対して軍事関係全面停止の制裁を科していた。ジャカルタでは数万の学生たちが反国軍のデモを繰り広げていた。元政治囚たちは、スハルト派と国軍内の強硬派が復活してくる可能性が十分あることを知っておりワヒド政権のもとにあっても用心深くしていたが、かつてに比べればかなり自分たちの経験を語れるようになっていた。

我々は聞き取った話の真実性について慎重を期した。個人からの聞き取りについては、それ自身の内容の一貫性、他の証言との整合性、語り手の印象からする信頼性、またその語り手の知り合いからの確認などによってその真偽を判断した。さまざまな証言を広く比較し検討できるように、全国からたくさんの被害者に聞き取りを行うことにした。これによって例えば逮捕された人、拷問を受けた人、投獄された人、解放された人のそれぞれの数を明確にしたいと考えた。聞き取りは語り手の自宅の居間で、家族や友人も同席して行うことが多く、同席した人たちが話を補足したりした。また同じ町あるいは刑務所にいた人々にまとめて聞き取りを行うことで、一つの出来事について異なる説明を得たり、共有された経験について異なる感想を聞くことができた。聞き取りでは、その人が誰かから間接的に聞いた話よりも、直接経験したことに重きをおいた。

聞き取りを中止した対象者も多くいる。調査員が数度にわたって面会したある元政治囚は、話が曖昧で、まるでなにか隠したいことが多くあるようだった。誰でも自分の人生について語る時には、例えば恥ずかしい話とか何か隠しておきたいことがあるものだが、その男性は語ることすべてについて何か過剰に注意深くなっているようだった。さらに彼の話は、彼の友人が彼について

話した内容と食い違っていた。また別の元政治囚の話には妄想が多かった。例えば彼はブル島で元アメリカ大統領のジミー・カーターに会ったと言うのだが、カーターがその島を訪れたことはない。彼の友人によればこの人は時々ファンタジーの世界に入り込んでしまうようで、多少合理性がない場合があるのだが、非常に面白い人物だった。口をきくことができない元政治囚もいた。この人との最初の面会で、我々は彼が人生のなかであまりにも深い苦痛に苛まれつづけ、無力感に押しつぶされて、影のような存在になってしまったのだとわかった。

我々はこの聞き取りによって歴史的事実を再構成するに足る情報を得ようとしたのであるが、その中で歴史とは必ずしも過去の出来事についての真実を知る、ということだけではないことに気づいた。それは一般の人々がもっている過去に対する認識を検証することでもあるのだ。オーラル・ヒストリーの実践は古くから言われている次のことを強調する。人間の行いについて、真実とは絶対的なものではない。何に関するものであれ、そこには無限の真実が解釈可能である。事実として証明することへの道筋は極めて鮮明であるが、歴史にとっての最大の課題はそこにあるのではない。無限の事実があるなかで、どれを議論すべきかということこそ、最大の課題はある。歴史は「唯一の真実」に向かうものではなく、むしろ「多くの真実」に向かうのである。

イタリアの歴史学者アレサンドロ・ポルテリの著作は、過去が現在に対して持っている意味について探求する学として、オーラル・ヒストリーの概念を切り開き、これにたずさわる多くの研究者の教科書となってきた。客観性に固執する古典的な歴史学者たちは、人間の記憶の不正確さをオーラル・ヒストリーの致命的な欠陥と考えてきた。だがポルテリにとってみれば、その欠陥にこそ積極的な意味がある。「記憶は事実を正確に保存する貯蔵庫ではない。だが記憶は意味を作り出す積極的な過程である。故に歴史学者にとって口述情報をもつ特別な意味とは、過去を保存することよりも、記憶によってつくられる変化にこそある。

この変化こそが、過去を意味づけ自らの人生を形作ろうとする語り手の意識を明らかにする。そしてこの変化こそがその聞き取りと語りを歴史的文脈のなかに据えるのである。」語り手がある事実について勘違いをしている場合でも、しばしばその勘違いの根拠そのものが社会的記憶の何か重要な作用を明らかにするようなかたちで引き起こされているのである。

我々が聞き取りをおこなった260人は幸運な人々だということを、この本の読者には理解してほしい。彼らはあの大虐殺を生き延び、長年にわたる投獄にも耐え人間性を保ちつづけてきた。彼らは自らの経験について語ることができ、これを記録することを受け入れた勇氣ある人々なのである。

## 執筆

この本に収録された論文は、聞き取りに参加した6名のボランティアによって書かれたものである。それぞれの主題は、聞き取りのなかで浮かび上がった重要な論点のなかから選んだ。ただし言うまでもないが、これによってすべての論点が網羅されたわけではない。ほかにも取り上げるべきテーマがあったが、メンバーの関心からこれらの主題が選ばれた。

読者はここに二つタイプの論文が収録されていることに気が付くだろう。収録されたうちの3つは歴史的な出来事や経過を分析したものであり、他の3つは被害者の個人的な感覚や視点を扱っている。前者は被害者らの個人史のなかの特定の時期に関するものであり、後者は被害者の個人史全体を扱っている。前者は歴史的分析という論理的な枠組みに沿って書かれており、ここでは個人の証言から学ぶことは少ないだろう。一方、後者は被害者の経験を時間を追って扱っており、読者はその人の人生を詳細に理解することができる。リント、ラジフ、アンドレによる論文は歴史的分析に属するものであり、アシ、アキノとジョ

ン、ヤンによるものは個人の記憶に関するものである。

すべての論文で、聞き取りからの引用は段をずらしたパラグラフとして記載してある。引用は録音テープから一語一語おこした。我々が書き換えたり書き換えたりした部分はない。語りを読みやすくするために何ヶ所かで聞き手の質問を、また1、2ヶ所で語り手の発言を削除した。我々は読者が目にする文字が語られた言葉と完全に一致するよう努めた。きれいな文章にするために、不規則な発話法を整理することもしなかった。オ

ーラル・ヒストリーを記述する目的は、読者に語り手の声の感覚を伝えることにある。文字によって声の質感を完全に伝えることは不可能であるが、その一部を伝えることはできる。

記載されたほぼすべての人命は仮名である。元政治囚に対して脅迫が継続している状況のなかで、多くの被害者たちが実名公表に危険を感じている。特に表記がない限り、語り手の名前は実名ではない。ただし地名、日付については語りをそのまま引用した。

## おわりに

この本は2004年に出版され、すぐさま大きな反響を呼んだ。Kompas紙やMedia Indonesia紙などの日刊紙、Tempo誌などの週刊誌などに多くの肯定的な書評が掲載された。その中では、この本が9月30日運動を取り巻く謎にではなく、各地の被害者の経験に焦点をあてたことが高く評価された。1965年の悲劇を扱ったこの本が、その被害者でも加害者でもなく、これまで歴史研究をしたことがなかった若い研究者によって書かれたことも注目された。

2004年を通して、執筆者と編集者はジャカルタ以外のポンティアナック、デンパサール、バンドン、ジャンビなど各地で講演を行った。大学生や歴史研究者、活動家とも議論した。多くの人々がこの本が1965年の悲劇を理解する重要な一歩になると評価するなかで、「社会の古傷に触る」として我々を非難する人もいた。こうした人々によれば、1965-66年の暴力を取り巻く沈黙を破れば被害者たちの復讐心に火をつけ、新しい暴力の連鎖を開始させることになるというのだ。だがこうした心配には根拠がない。被害者たちには40年間という時間があつたが、復讐によって殺されたものは一人もいなかった。我々が話した被害者のなかで復讐を口にしたものはいなかった。彼らが一様に口にしたのは、被害者たちは9月30日運動とは関係のない善良な人々だったと歴史のなかにはっきりと記し直してほしい、ということだった。被害者たちは社会によって受け入れられることを望んでいる。1965年の前も後も、彼らは国のために貢献することを願っており、そしてそのことをこれまで以上に認めて欲しいと願っているのである。

かつてのスハルト支持者のなかには、この本に1965年以前にPKIが犯した罪についての記述がないことを理由に、我々がPKIを支持し共産党の再建を目指しているのではないかと疑うものもいた。我々はこうした批判を、スハルト時代の「何も知るな」という態度を復活させる策動以外の何ものでもないと考える。1965年以前のPKIについては、これを記したスハルト時代の歴史書のなかにある嘘と歪曲について、また別の本を執筆して明らかにする必要があるだろう。1965年以前、共産主義者と非共産主義者との間には抗争があつた。その抗争のなかでどちらか一方が純粋に正義で、一方が純粋に極悪だったということはありえない。スハルト体制によってつくられたPKIだけが暴力をふるったという話は、善対悪のおとぎ話の類である。1965年にPKIが行ったどのような行為によっても、1965年以

降に発生した大量虐殺、大量投獄を正当化することはできない。これは自明だと我々は考える。

歴史研究の専門家たちからあがった質問は、被害者の語りに依拠するとき、どの程度まで調査の「客観性」を保障しうるか、というものだった。我々が被害者の話に大きなスペースを割いていることで、我々を被害者の「同志」なのだろうと考える人も多くいる。インドネシアの歴史学者は政府文書や政府高官による文書からの情報以外は信用できない、あるいは重要でない、バイアスのかかったものだと考えることに馴らされており、こうした反応は予想されたものである。

我々が聞き取りをした人や、この本を見てはじめてこのプロジェクトの存在を知った被害者たち自身からの反応は、予想以上に私たちを励ますものだった。この本は被害者の話を堂々と、理解ある形で発表した最初の本だ、とってくれた人もいた。中部ジャワ・ソロのある元政治囚の妻は、自分の子どもも含めてこれまで誰にも自らの体験を語ってこなかったが、娘にこの本は1965-66年の悲劇を記した手本だと話した。パリのある研究者は、当時テロを目撃していた近所の男性がこの本を見つけてどうしても読みたいといってコピーをとった。そして自分の友人や親戚にそのコピーを配ってまわっている、ということを教えてくれた。

聞き取りに応じてくれた人のなかには本を読んでから、自分たちの話をこんなに詳細に丁寧に本にしてくれるなら、もっとたくさん話をすればよかったと言う人もいた。聞き取りのなかで我々は、語り手のなかには完全には心を開いていない人もいたということに気づいていた。彼らは自分を善良な人として書いてほしいと願っていたのだが、長年にわたって「PKI」として悪魔扱いされたせいで、善良と思ってもらうには1965年以前にPKIには参加していないと認識されなければならないと思こんでいたのである。多くのインドネシア人がそうであるように、この調査員も当然PKIとのつながりを持っている人を恐れるだろうと考えて、その語り手たちは自分とPKIの関係を控えめに語る傾向があったのである。この本のなかで1965年以前を取り扱わなかった一つの理由は、被害者のその時期に関する語りは完全には信頼できないからということだった。だが、すでに被害者たちは我々がどのように歴史を記述するのかを理解し、このテーマについてもっと語りたと言っている。

出版してから我々はこの本の一部をラジオ番組にしてはどうかと考えた。そして、そのことをもうすでに実行した人がいることを知って驚いてしまったのであった。民放ラジオ局ジャカルタ・ニュースFMの担当者がこの本にいたく感銘を受け、我々への相談もなしに2005年4月、日曜日の夜に自分の番組でこの本のなかの二つの文章を読み上げて放送したのである。その後、彼が我々に語ったところによると、もともと彼は一回だけこの本を取り上げるつもりだった。だが本を読み終えて番組が視聴者からの電話を受けるコーナーになると、たくさんの電話がかかってくるまで自分たちの話をしはじめた。自身が被害者だったという人やその親戚、当時の状況を目撃したという人からの電話だった。電話をかけてきた人は、自分自身の経験を話したいという人か、あるいは被害者とその家族になぐさめの言葉をかけたいというものだった。もちろん読み上げられた内容に抗議するものもあったが、大半は痛ましい悲劇の記憶を共有したいという人たちからだった。番組が終わってからも局は電話の受付をつづけた。その担当者自身、気が付くときにかく誰かに話を聞いて欲しい電話の相手と深夜まで話していた、という。この反応を見て彼はその後二回、番組で本の文書を読み上げ視聴者からの反応を呼びかけた。

この本によってオーラル・ヒストリーに取り組みはじめた若い研究者たちもいる。「人道のためのボランティア・チーム (TRuK)」は1998年5月の暴動、そして1998-99年にジャカルタで起きた大学

生への虐殺事件について、オーラル・ヒストリーの調査プロジェクトを進めている。下層の子どもたちのあるグループは、ジャカルタの北東部にあるカクンのゴミ集積場で暮らす人々のコミュニティーの歴史についての調査を開始している。この本の執筆者の一人でもあるリント・トリ・ハスワロは日本軍占領下での東ティモールの従軍慰安婦の経験について、オーラル・ヒストリーの調査をコーディネートしている。また一方では、1965年の悲劇が一般の人々の人生にどのような影響を与えたかについて、様々な調査が開始されている。この序文を書いている間にも、少なくとも4つの調査プロジェクトが次のようなテーマで進められている。中国人学校の破壊について、1965年以前と以降の女性活動家の経験、東カリマンタンの村にある元政治囚のコミュニティーについて、港湾と鉄道労働者の経験について、である。抑圧され周縁化された社会集団からの声がさらに加えられることで、この数年のうちにもインドネシアの歴史記述がスハルト時代のそれとは大きく変わっていくことを、我々は強く期待している。

【日本語訳 河合大輔】